

FD研修会を終えて

阿部文雄（大学教育開発センター長）

今年度も、大学教育開発センター主催による「全学共通教育の平成19年度実施に向けた研修会（FD）」が、12月5日に開催されました。多くの先生方に参加して頂き、お礼を申し上げます。当日は、まず第1部「全般的課題」で、全学共通教育の現状と課題、キャリア教育、新入生アンケートの分析、e-learning およびオリエンテーションをテーマに報告と討論が行われました。

続いて行われた第2部「ワークショップ（各科目別分科会）」では、主題科目、教養ゼミ、既修外国語の3つの分科会に分かれて、今後の課題や取り組みをめぐって報告や討論が行われました。いずれの会場でも、参加しなければ知る機会の少ない貴重な報告や議論が行われ、参加者にとって有意義な研修会だったと思います。

ところで、FDという言葉が私が始めて聞いたのは、多分10年位前だったと思いますが、当時、私の所属していた経済学部の方の教員にとっては、縁の薄い、遠いものという印象でした。それが、さまざまな試みを経て、次第に身近なものとなり、現在では、参加が義務付けられたり、教員評価に組み込まれたりと避けて通れない仕事の1つとなってきました。FDの実施形態も、学内で講演会を開催したり、討論に参加するというのが一般的ですが、一時期、五色台国民休暇村等での合宿という形で行われたこともありました。一泊研修のような形は概して不評のようですが、専門分野や部局の壁を越えて、授業や教育について自由に語り合える「教員コミュニティ」の形成にFDの意義があるとすれば、再考の価値があるのではないかと思います。実際、成功している大学もあると聞きます。

現在、教育分野のセンターを統合した「教育・学生支援機構（仮称）」の設置に向けた検討と準備が進められています。センター間の連携によって、教育改革の推進や現代GPなど全学的なプロジェクトの立ち上げなどとともに、パワーアップしたFDの実施も可能になるのではないかと期待しているところです。

本学は、「学生中心の大学」を目指すと標榜していますが、それは「教員中心の大学」ではないことを意味します。より一層の学生支援体制の構築が求められているのかもしれない。「おいおい、待ってくれよ」という声も聞こえそうですが、大学はどんどん変貌と進化を遂げています。本学の教職員が教育についてフランクに語り合える環境や風土を作ることを念頭に置き、今後のFDを考えていきたいと思います。教職員の皆様のご協力・ご支援をお願い申し上げます。